

2026年9月6日（日）

老球の細道939号

写真とカメラサイトウ杯第24回ミニバスちびっ子大会興奮観戦記

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

父と同じ病気を患ったせいか、今は亡き父のことをよく思い出す。スポーツと映画が好きだった父は、小中学校生だった私をよく映画館や中学生、高校生の野球観戦に市営野球場（現在の県歴史博物館）に連れて行ってくれた。

私が中学生になると、私のバスケットの試合をよく観戦に来た。また、私は中学3年生になるとバスケットだけでなく特設の駅伝部にも選抜されていた。全会津中学校駅伝大会では若松二中のアンカーを務め、門田小学校から小田橋、若松二中の脇を通って鶴ヶ城入り口から旧市営陸上競技場までの最終区間を走った。今でも思い出す。最初からペースを出し過ぎて小田橋付近でペースダウンしてしまった。そしたらどこからとなく自転車に乗った父が現れた。私の伴走をしながら「ふみひと！がんばれ！」と気合を入れた。おかげさまで、私は途中であきらめることなくゴールまで走り通すことができた。

高校生になっても会津地区のバスケット大会はほとんど見に来て応援してくれた。父は車を持っていなかったのバイクに乗って観戦に来た。当時（昭和40年代）子どものスポーツの大会に応援に来る親などあまりいなかったの、私は子どもながらに鼻高々だった。

時空を超えて令和の現在、私はわが子のミニバス、中学バスケットの応援、観戦がほとんどできなかったの、孫が出来たらバスケットをやらせ、必ず応援、観戦をやろうと心に決めていた。幼稚園に入る頃から何かと機会があったらバスケットに触れさせながら、嫌いにさせないようにそーっと、そーっと育成(?)してきた。

地元の小学校にはミニバスチームがなかったので、指導理念を同じくする佐藤公希氏が指導する城北・行仁チームに入部した。孫たちは入部して2年が経過したが、順調に成長してきたと爺々最真目で見ている。今や我が家は孫たちのバスケット活動で動いている。

先日待ちに待った孫息子のチビっ子大会（4年生以下）があった。今まで5、6年生と一緒に1Qくらいはゲームに出ていたが、ボールに触れることはわずかな回数で、ほとんどシャトルランだけだった。シュートでも決まったら大騒ぎして、私は「ヤマダ電機」で孫息子にトミカのご褒美をするのが定番だった。

ところが、4年生以下のチビっ子大会になると孫息子の出場時間も長くなり、同時にシュート回数も増えた。その結果自ずと得点も増えた。私は2階の観客席の最前列に場所を占め、孫息子の一挙一動に目を凝らし、応援に集中した。孫がシュートを決めるたびに、現役コーチ時代に選手がシュートを決めた時にベンチでのガッツポーズと「よし！」の気合ボイスが出た。身体も熱くなり、3Qのみのゲームであったが、孫よりもくたくたであった。

2回の応援席で観戦していると保護者の応援風景も面白い。子どものプレイに一喜一憂するのはもちろんであるが、「チーム・ザ・親」と名付けたらいいか分からないが、まとまったユニフォーム、声掛けなどで子供以上に盛り上がっている。親が燃えれば子供も育つ。